

# システムからプロセスへ

—市民性教育と生涯学習—

牧野 篤

(生涯学習基盤経営コース)

「私の周りには、自分を大切にできない子が多くいます。……  
その中でも、高校一年生の頃からの友人で、リストカットを一  
〇〇回以上繰り返す子との関係の持ち方については、考え  
させられました。」「その子は、中学校の頃のいじめがトラウ  
マになって、高校一年の夏から不登校になりました。人格が  
解離して、突然言葉遣いが悪くなったり、幼児に戻って「何で  
お化粧するの？幼稚園でしょ」などと言ってきました。その後、  
つきあっていた彼氏とも病気が原因で別れ、さらに荒れまし  
た。保健室登校まで何とかもってこれて、私は彼女と昼お弁  
当を外へ食べに行っていました。私たちが、卒業すると同時  
に、彼女は学校を辞めました。」

「彼女からは、昼夜かまわず電話がかかってくる。メールも毎日きます。過食気味の最近は、毎日体重の報告メールがあります。彼女は、友人とうまくいかなかったり、恋愛でふられたり、アルバイトをはじめて上手くいかなかったり、そのたびにリストカットをします。この間は、リストカットした腕の写真をメールで送ってきました。共感的な他者として私がいることで、自分を認識できるのでしょうか。どうしたらよいのかわからなくなっています。」

私の友だちは、リストカッターです。自分でもわからないけど、  
なんとなくリストカットをするのだといいます。やめられないのです。

社会で生きるということ

事後的な自己認識—過剰な自己の達成

他者から自分へと還ってくる自己の存在

意識せずして行動していることが  
後から自己へと還ってくる＝意識化される

他者＝〈ことば〉に媒介される意識と無意識

他者への想像力がもたらす自己認識

〈贈与〉と〈答礼〉＝〈交換〉

事後性と過剰性、その間を媒介する想像力

想像力を媒介する〈ことば〉

〈わたし〉は〈わたしたち〉だからこそ〈わたし〉

この関係が崩れている＝〈わたし〉であることの病

近代産業社会＝近代国民国家

均質な労働力と広大な市場

空間的な配置＝学校と地方行政制度

戸籍制度と学区・町村制

規律と訓練の場としての空間

パノプティコン

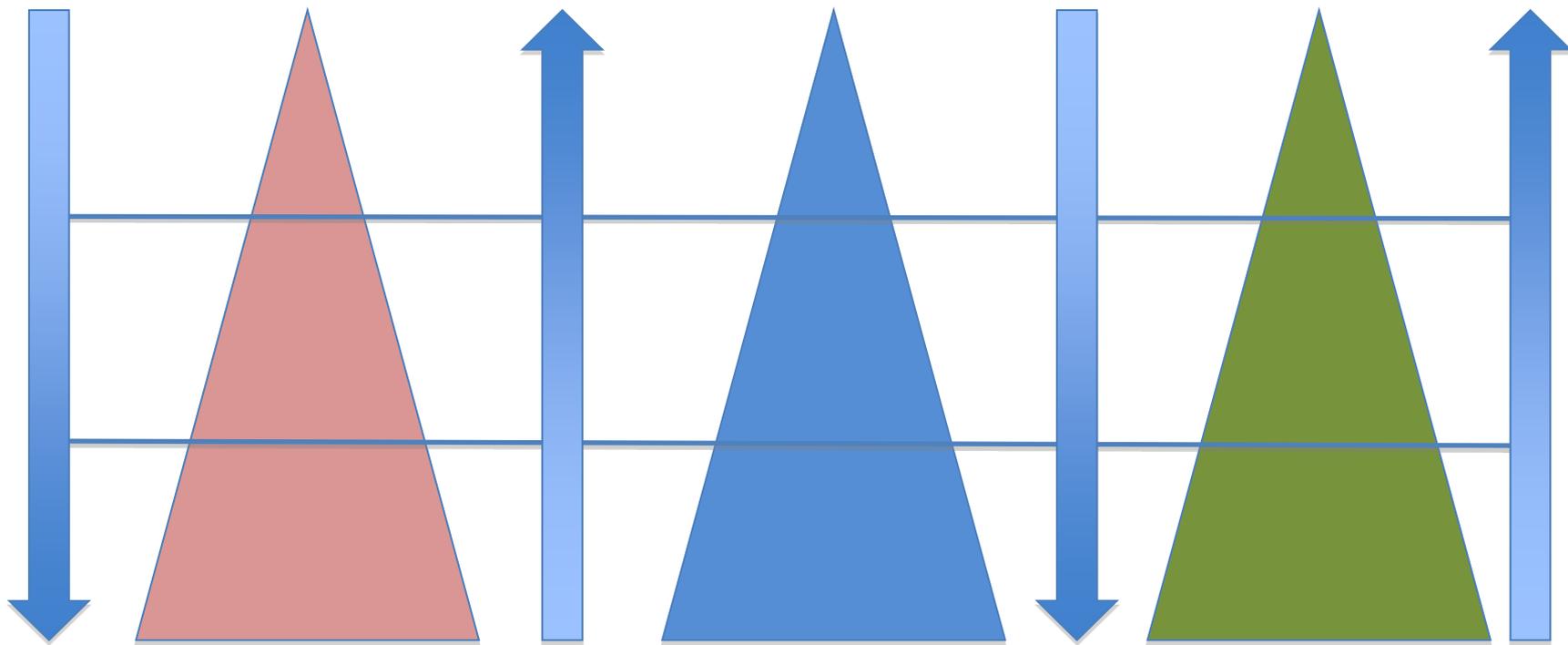
規律・訓練

伝達

発達

秩序

選抜



「知」

人格

国家

システムとしての国家・社会、人格、「知」

国家が「知」を分配し  
人格を形成する

「知」へのアクセスの平等化  
均質な「国民」の形成

労働力と市場

均質化は一様序列性へと転化する  
＝相対化の中の競争

社会教育と社会の裂け目

空間の均質化  
町内会の形成と学区・町村制

+

実業補習学校・青年訓練所・修養会・青年団・在郷軍人会  
・学校後援会など

国民を住民として育成  
学校中心自治民育

「社会」の成立

「社会」では、国家と町内会が、住民＝国民の生活においてズれる

均質性が一様序列性へ組み換えられる

社会の安定のために、経済発展が宿命づけられ

かつ、常に不利益層を備給し続ける必要

排除・隠蔽されていた層を〈わたしたち〉へと召還する

住民の国民化は町内会の地縁結合を解体

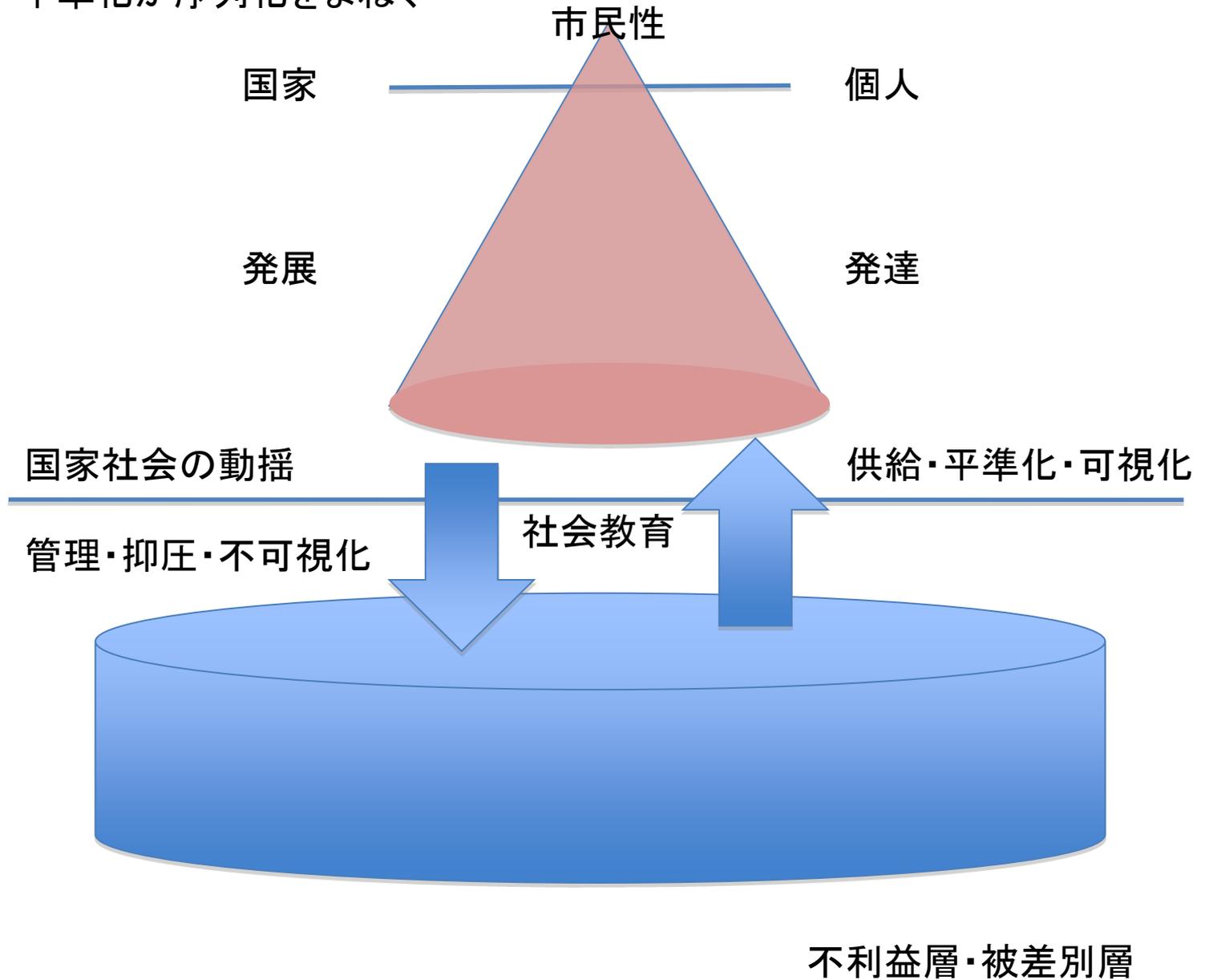
＝経済発展が均質空間である国民の紐帯を切断

「経済」と「福祉」が矛盾する→学校が個人の生活様式へと変換

＝規律・訓練

＝「文化」

均質化・平準化が序列化をまねく



## 近代国家のダイナミズム

〈わたし〉は〈わたしたち〉であることで  
一様序列性の競争へと組み込まれる  
＝〈わたしたち〉ではなくなる

〈わたしたち〉を平等性・均質性へともどすために  
「経済」が必要、「経済」が結合を解体するために  
「福祉」が必要、「福祉」を結び直すために  
「文化」が必要

システムへの帰属＝適応

この三者のズレを修復しつつ次のズレへと媒介するもの  
＝社会教育

国民=住民=市民性？

管理  
伝達

選抜  
発達

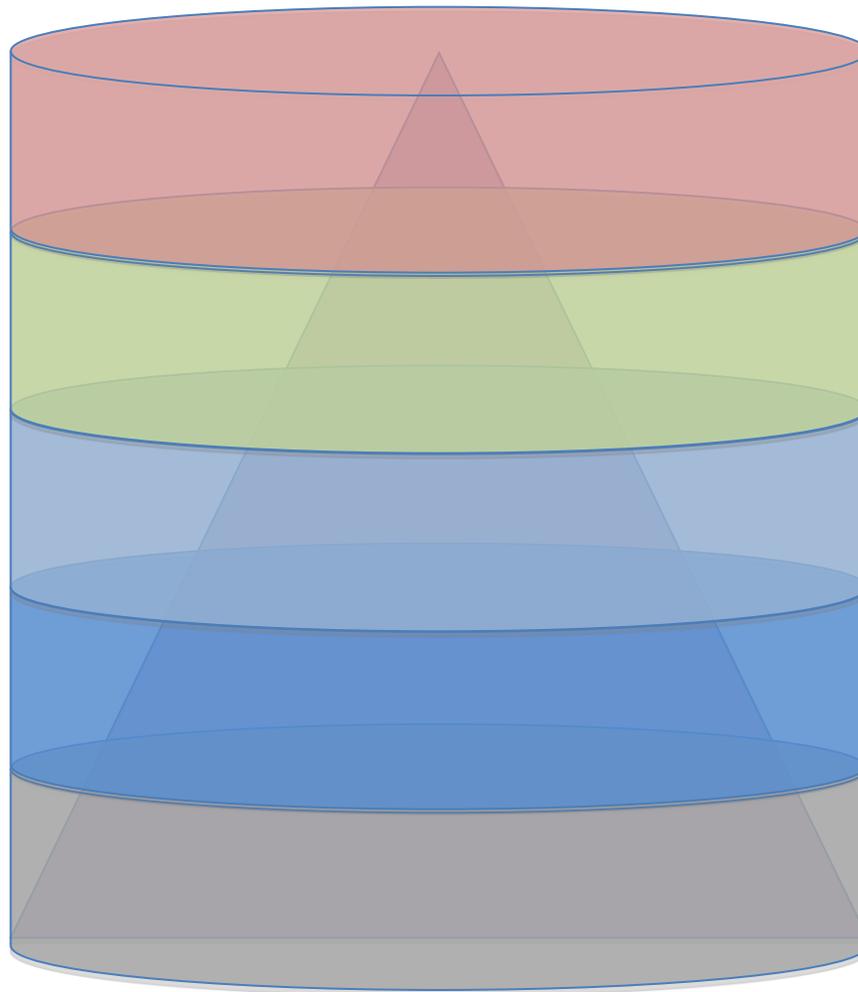
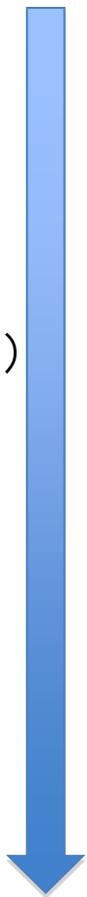
人格

行政  
(政治)

経済

福祉

文化



個人

ボランティアな組織  
企業

自治会  
地域自治組織

学校=学区

行政システム

分配・配置  
帰属

近代産業社会の枠組みが壊れる

〈わたし〉形成の困難

社会の中間集団と地縁結合が解体

システムへの帰属による〈わたし〉と〈わたしたち〉の形成が不全化

= 自我形成の不全化

「つながっている」感覚の消費へ

(『エヴァンゲリオン』、ニコニコ動画など、

物語消費からデータベース消費へ

携帯電話の即レスなど)

「いま・ここ」性を超時間・超空間的に「いつでも・どこでも」

管理  
伝達

選抜  
発達

~~国民=住民=市民性?~~

人格

行政  
(政治)

経済

福祉

文化

個人の肥大化

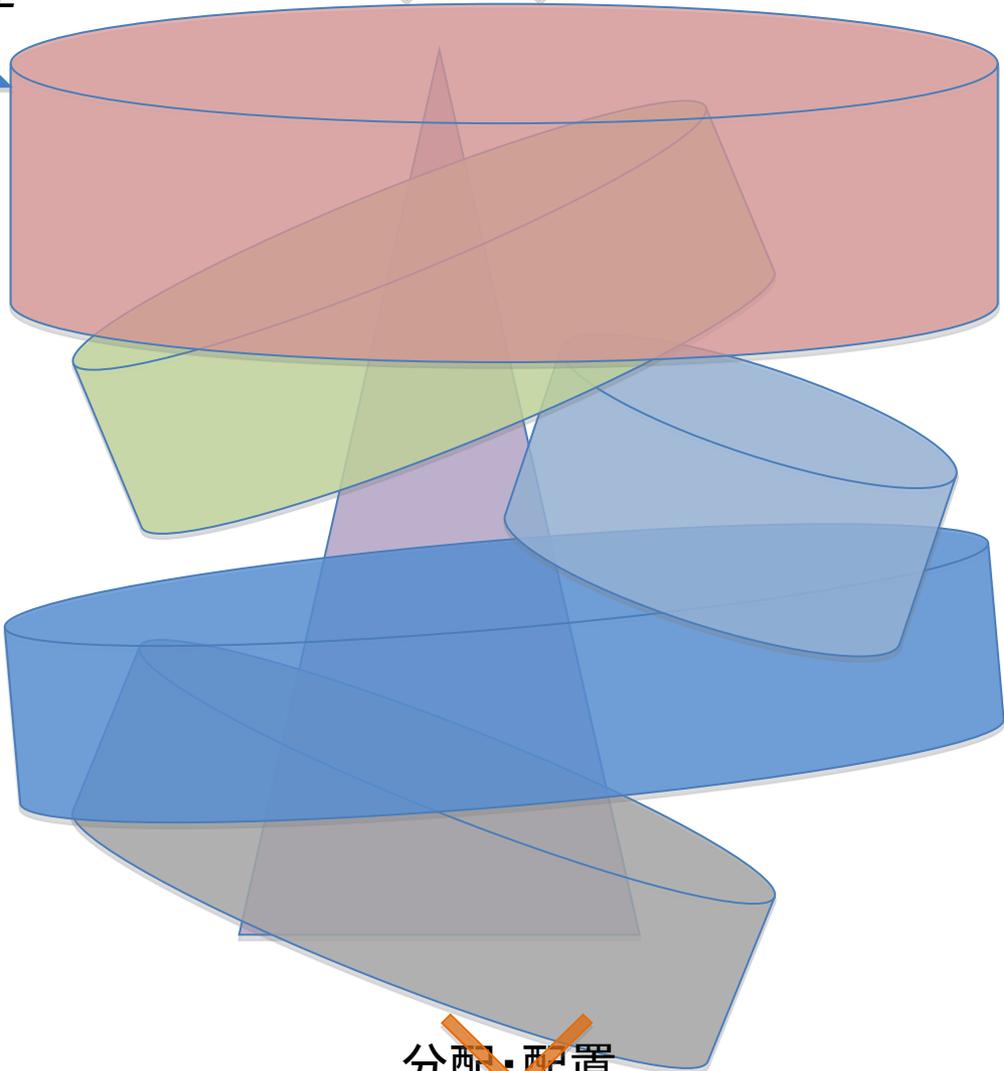
ボランティアな組織  
企業

自治会  
地域自治組織

学校=学区

行政システム

~~分配・配置  
帰属~~



ニューロ・マーケティング  
自己の多重化

対象の複製だけでなく、主体の複製が可能となる

+

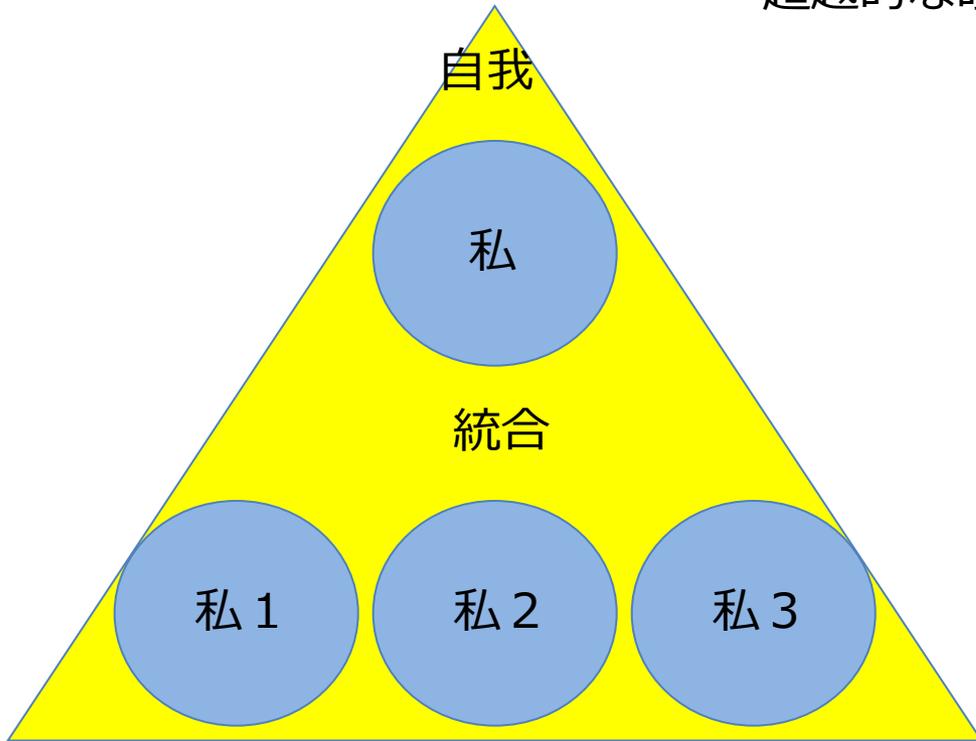
デジタル・メディア革命  
＝本質と現象の区別消滅  
現実と虚構の区別消滅

システムとしての社会とそこに生きる自己という存在の曖昧化

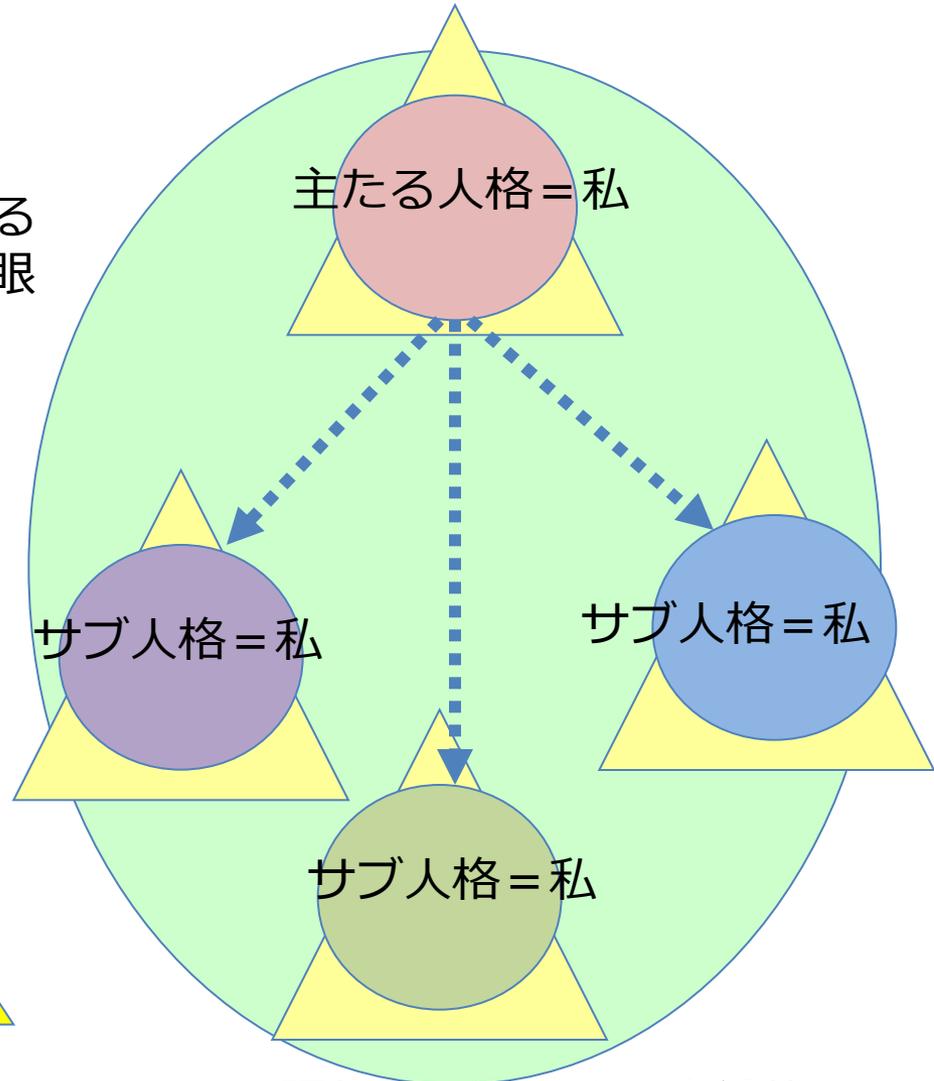


超自我

社会規範  
=私を見ている  
超越的な眼



多重な私は一つの自我に統合されている



言語的に記述できる完結態  
=相互に独立・不干涉

近代産業社会＝近代国家の  
自我を前提とした  
教育＝「知」の分配システムとしての教育の  
基盤が崩壊していく

システムとしての国家・社会、人格、「知」の解体

システムとしての

自我  
国家  
社会  
「知」

組み換えのプラットフォーム  
生成のプラットフォーム  
＝〈ことば〉と〈わたし〉

プロセスとしての

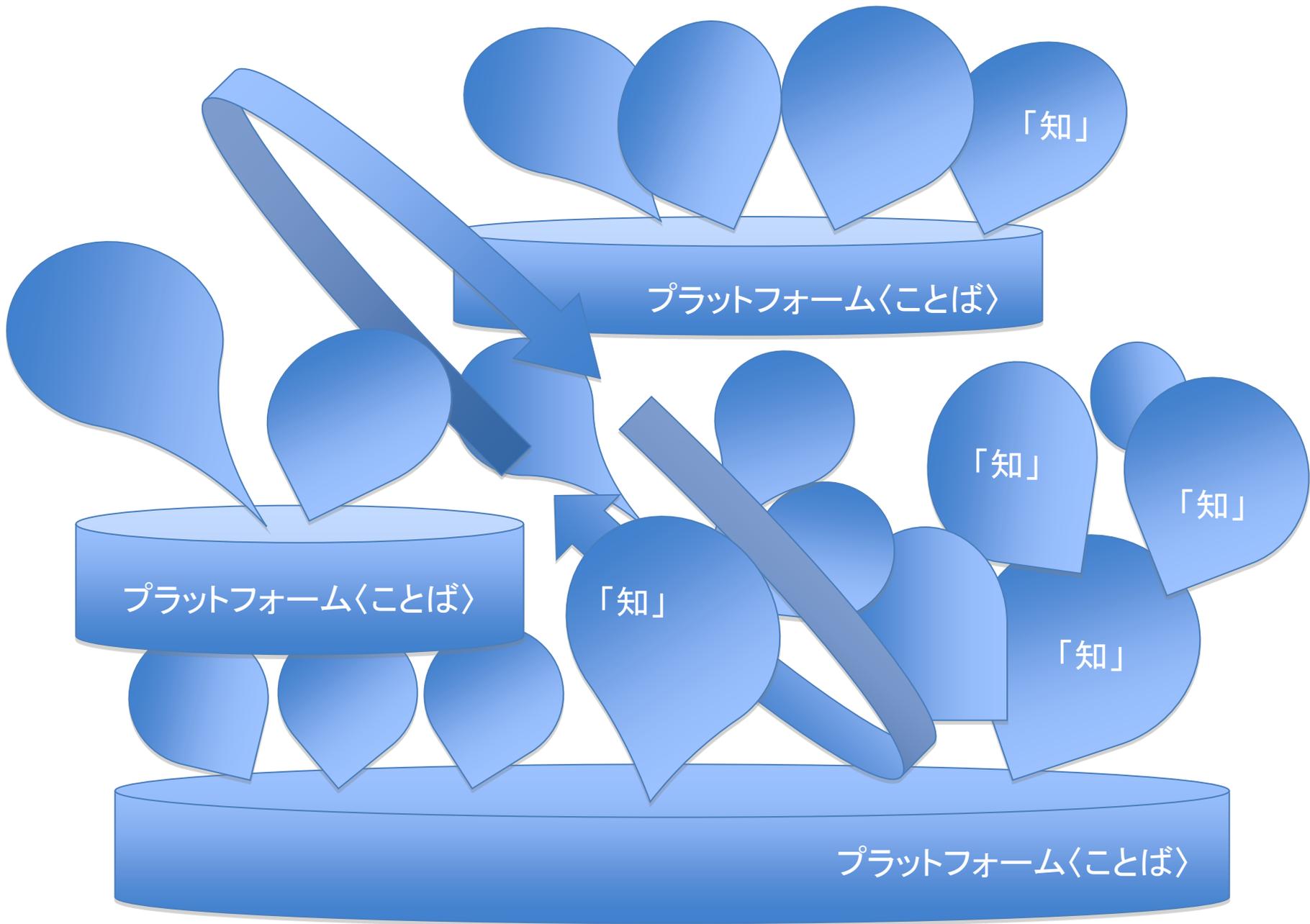
自我  
社会  
「知」  
〈わたし〉  
〈わたしたち〉

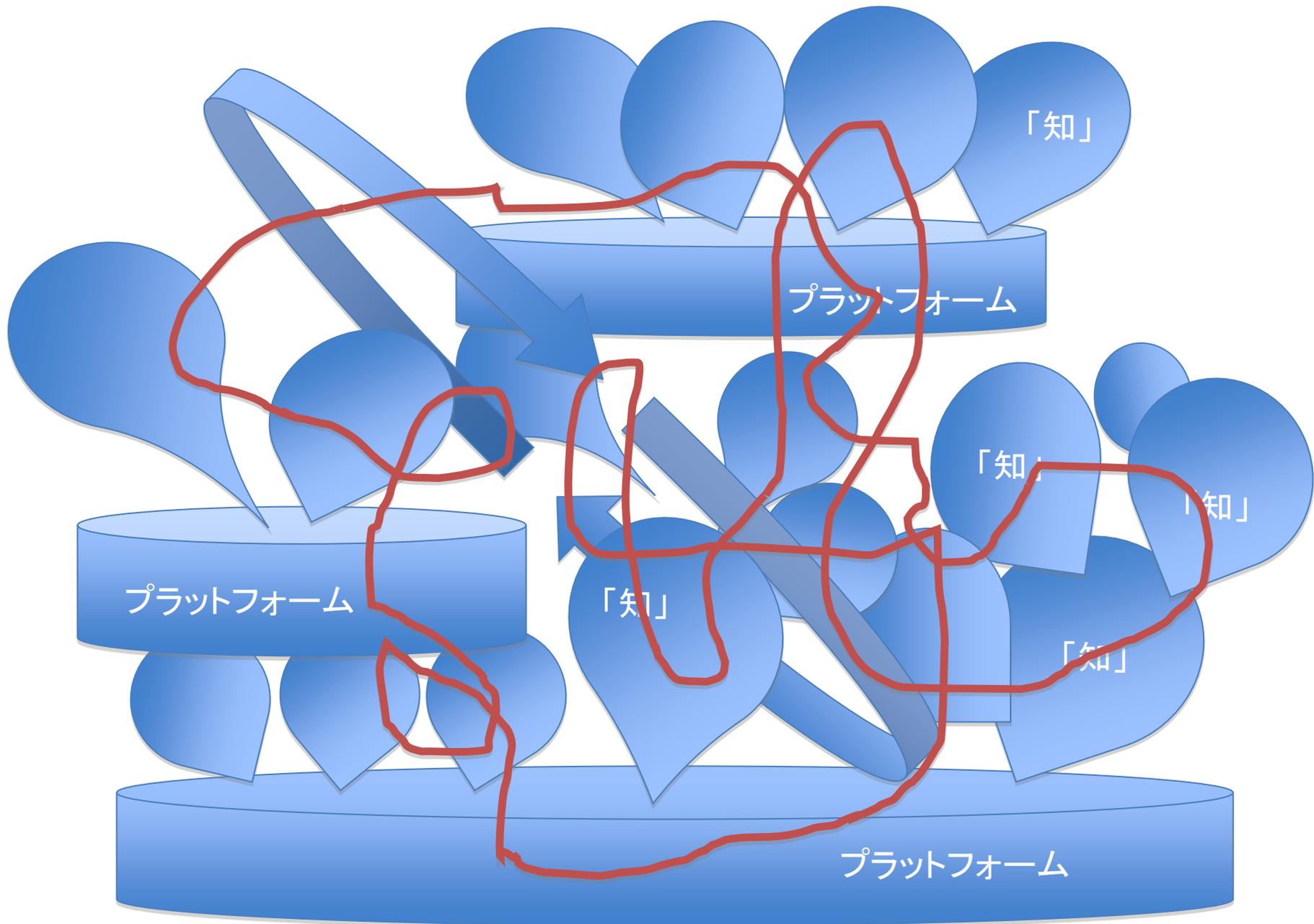
〈ことば〉によって私が他者に過剰に〈贈与〉  
→私は〈わたしたち〉となり、〈わたしたち〉の過剰性が  
〈わたし〉をつくりだし続ける

〈ことば〉によって媒介される「知」もシステムではなくなり、  
プロセスとなる

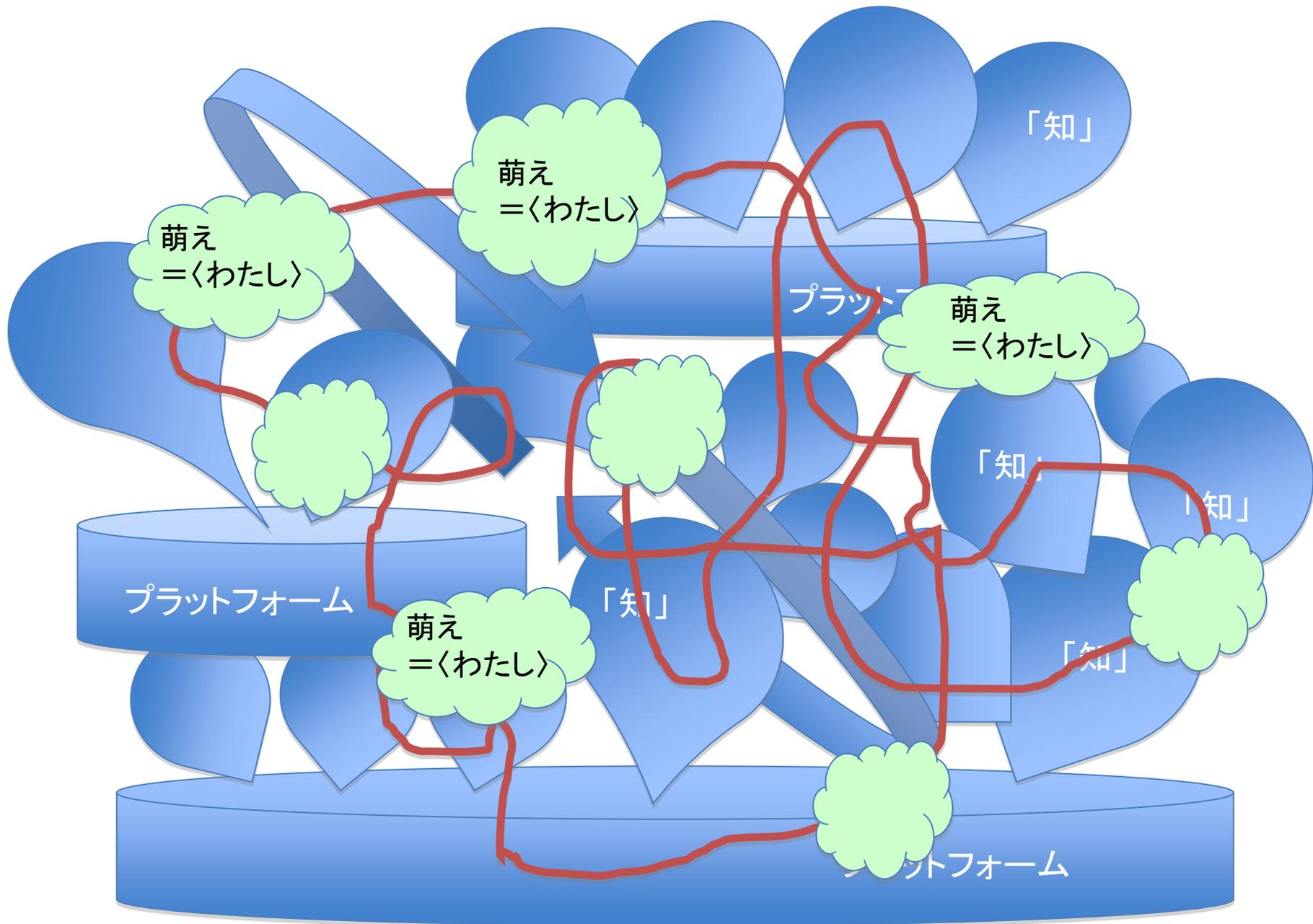
「知」の生成プロセスとしての関係性の〈社会〉

「知」の生成プラットフォームとしての〈社会〉

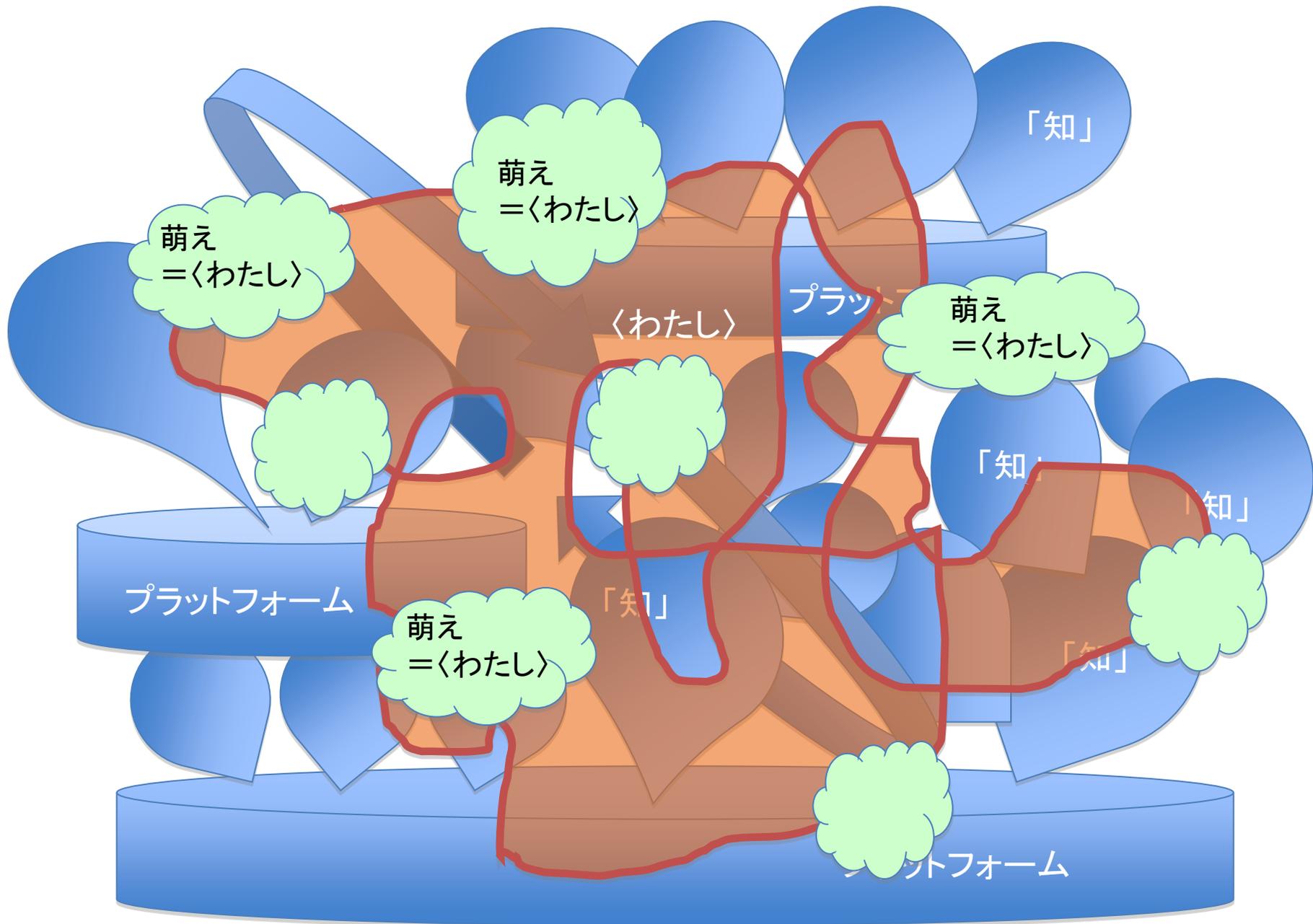




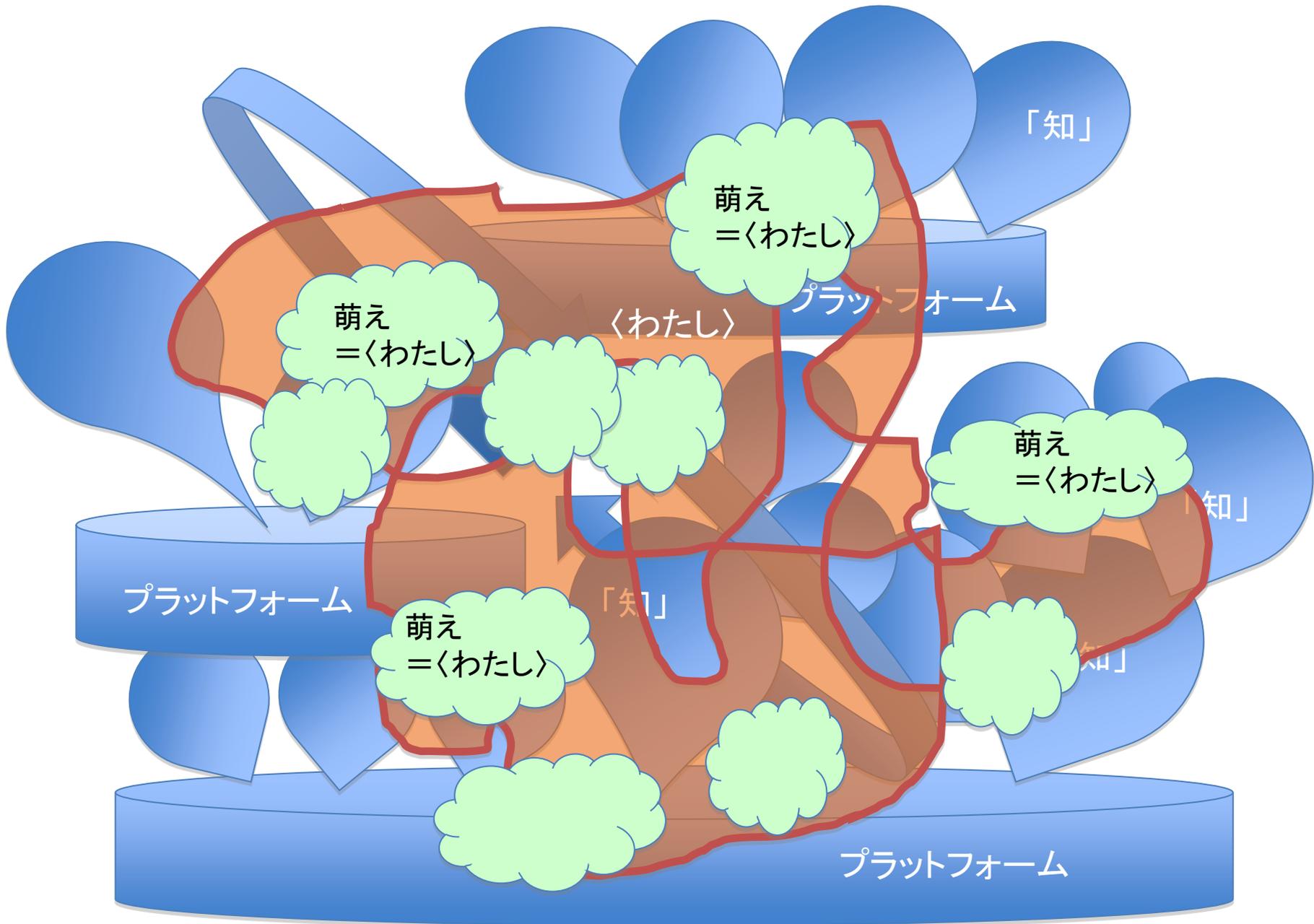
流動的なリソースの流動的な活用と自己の生成



流動的なリソースの流動的な活用とデータベース的な自己の生成



流動的なリソースの流動的な活用とフローまたはデータベース的な自己の生成



流動的なリソースの流動的な活用とフローまたはデータベース的な自己の生成

無意識が前景化する

世界は自意識の問題へ＝完全な主観の問題へと還元

完全な受動性としての〈わたし〉

この受動性に介在する〈ことば〉

超越的な他者によって投げられてある〈わたし〉、投げられてあることが〈ことば〉によってなされる

二重の意味で完全な受動性

〈否〉をいえる他者の存在

〈わたし〉は〈ことば〉ではいえない他者を抱え込む

「自己回帰」へ

つねに完全な意味で受動的に投げられてある〈わたし〉が世界を認識し、自己の過剰性を抱え込む

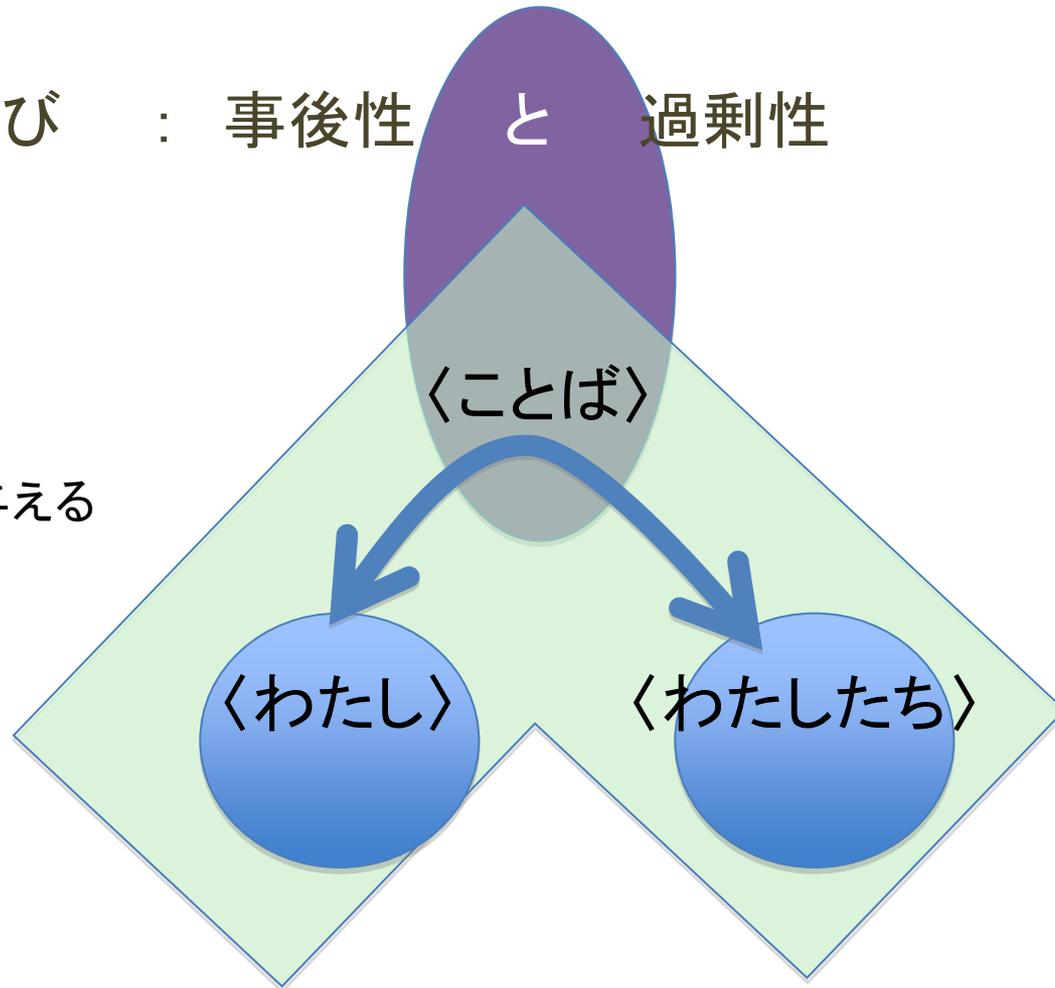
＝他者を抱え込まざるを得ない共生態としての〈わたし〉

＝〈わたしたち〉

# 学び : 事後性 と 過剰性

〈ことば〉による  
二重の受動性が  
〈わたし〉に  
自己への駆動力を与える

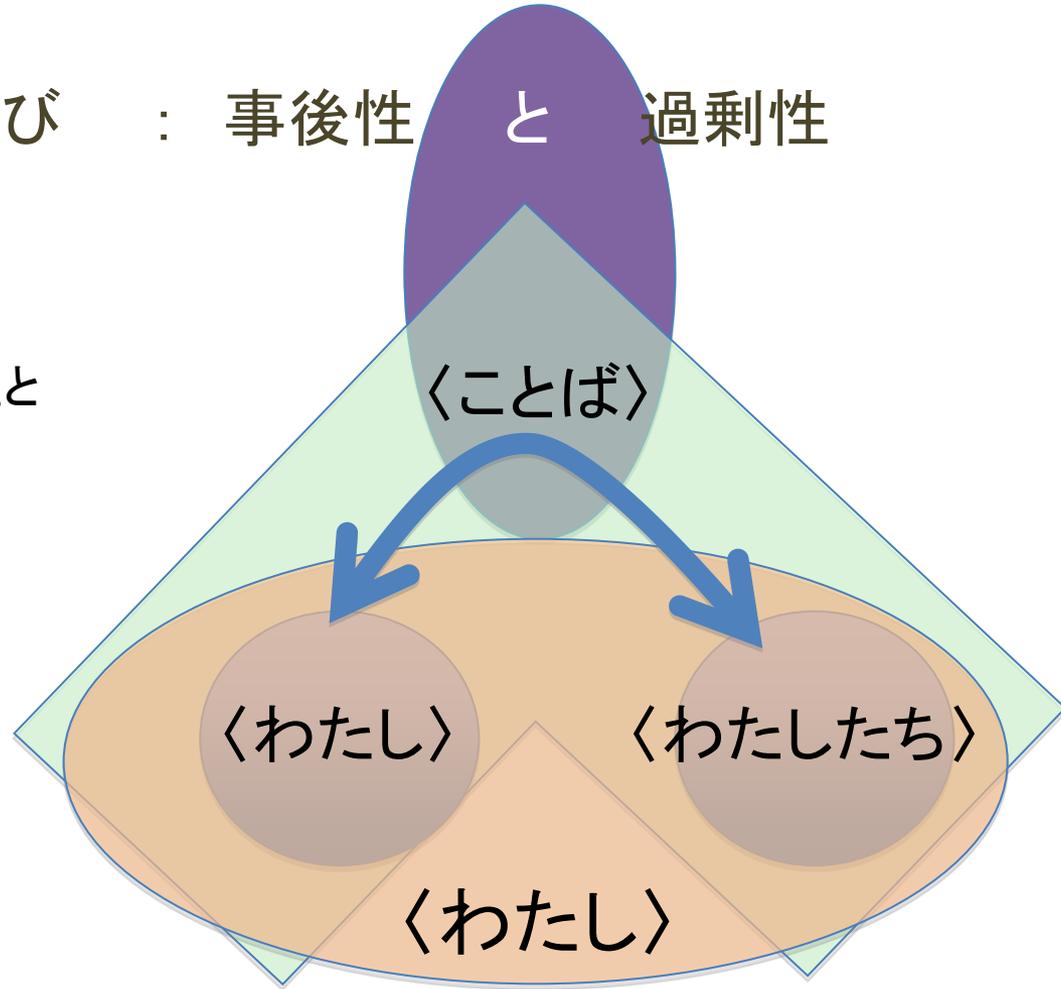
〈わたし〉は  
投げられてある  
が故に  
〈わたしたち〉で  
あり得る

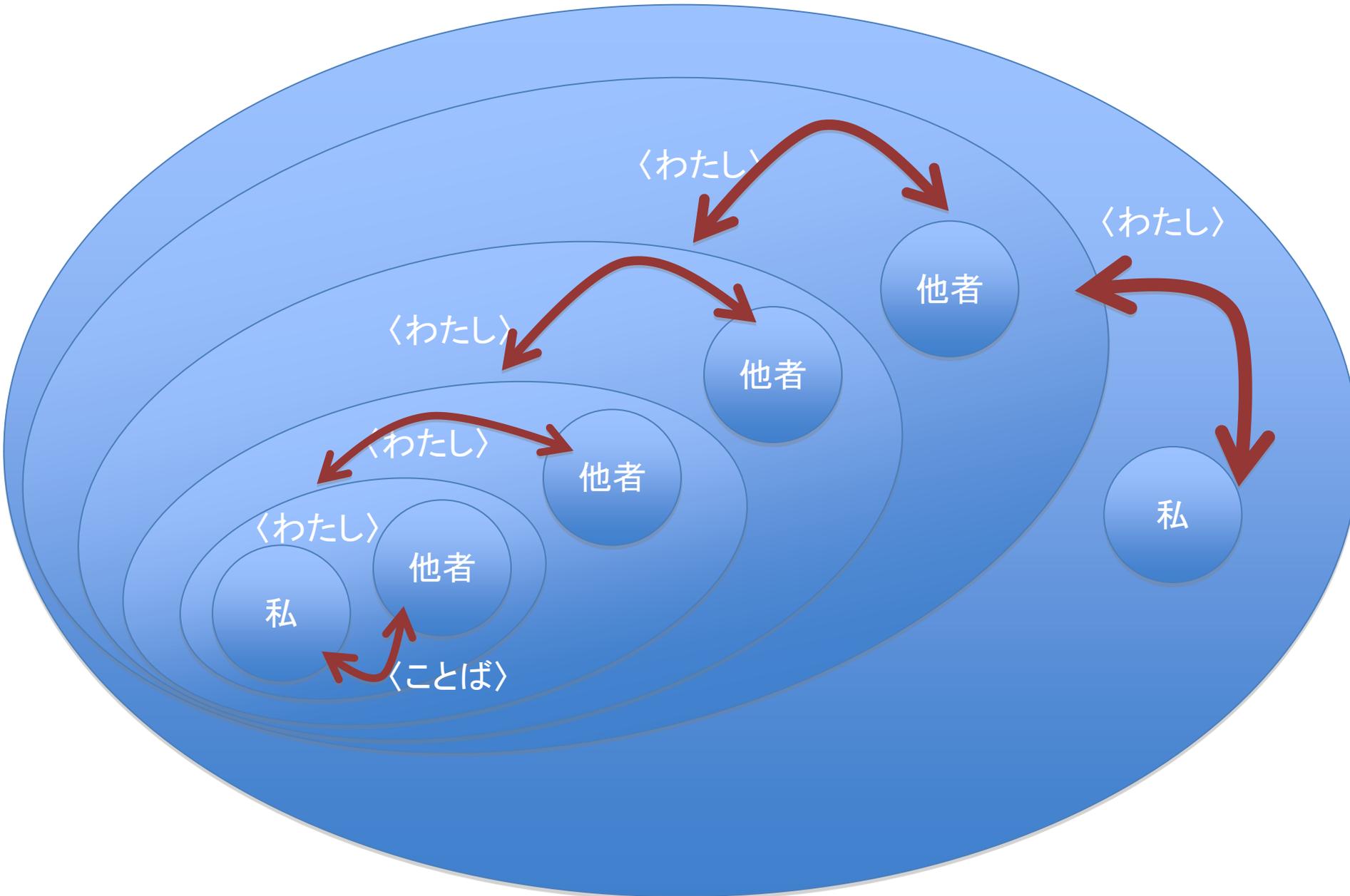


# 学び : 事後性と 過剰性

自己認識の事後性と  
他者の抱え込み  
自己への駆動力  
= 過剰性

他者と共生する  
〈わたしたち〉  
= 〈わたし〉





〈わたし〉

他者

〈わたし〉

他者

〈わたし〉

他者

〈わたし〉

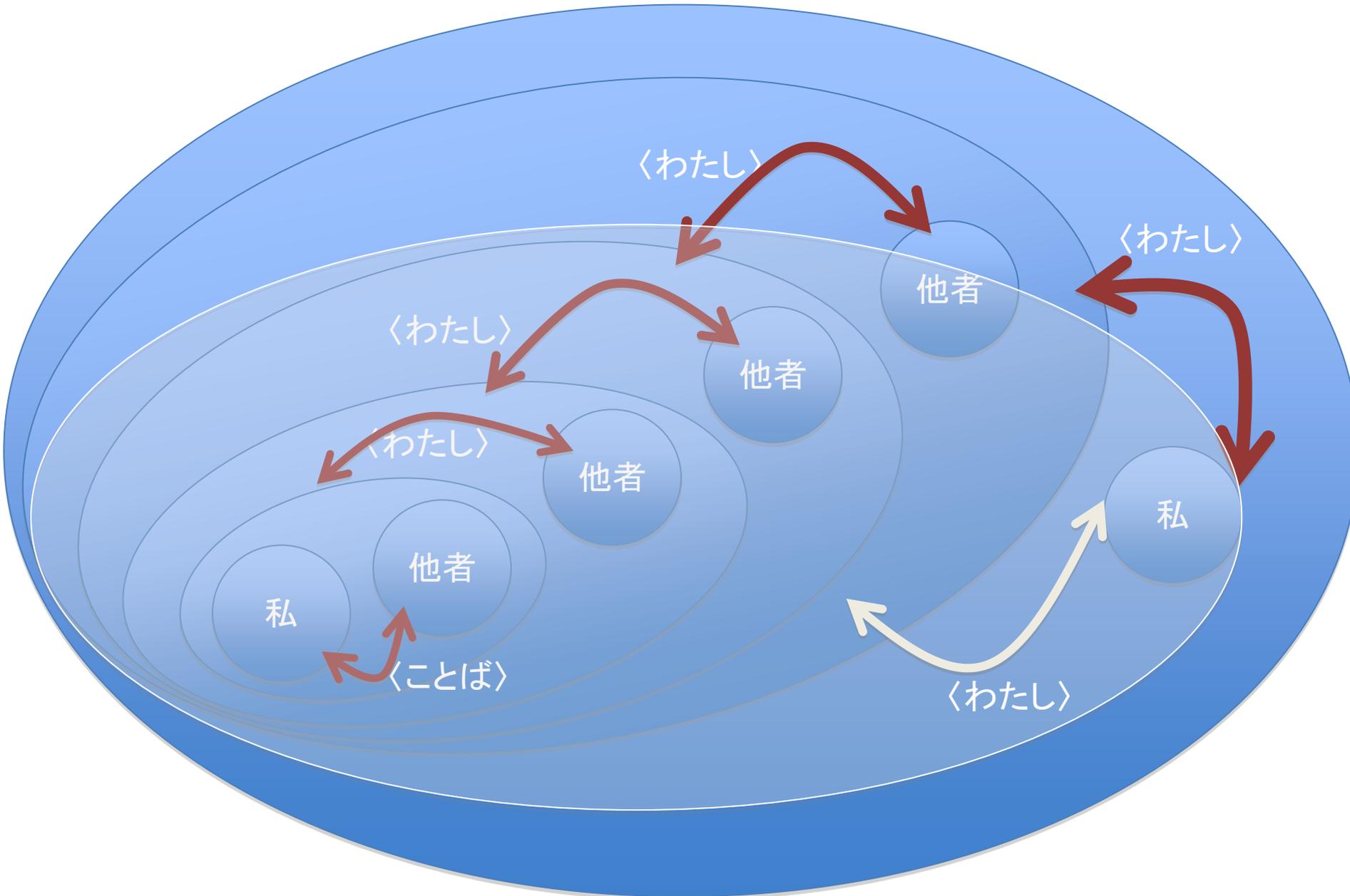
〈わたし〉

他者

私

〈ことば〉

私



わたし

わたし

わたし

わたし

わたし

ことば

他者

他者

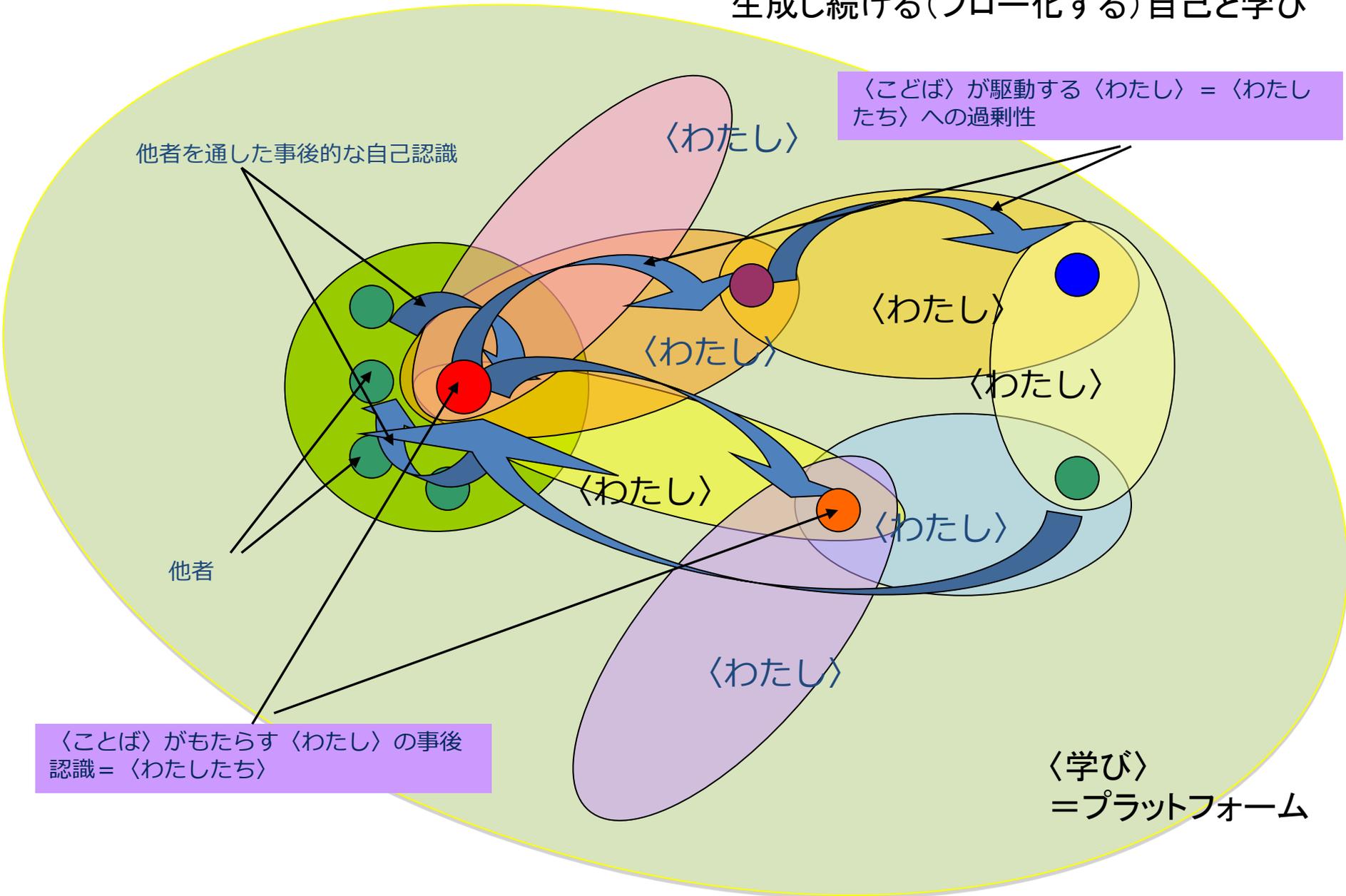
他者

他者

私

私

# 生成し続ける(フロー化する)自己と学び



〈ことば〉が発動する  
〈わたし〉＝〈わたしたち〉  
への過剰な駆動力

〈わたしたち〉であることが  
〈わたし〉であり  
〈わたしたち〉であるような自己

自己はシステム(ストック)ではなく  
プロセス(フロー・データベース)となる

「知」の分配へのアクセスの「平等」ではなく  
「知」を生成する  
＝〈わたし〉を生成する「自由」  
を保障する  
プラットフォームとしての  
教育＝〈学び〉

生涯学習から見た市民性：

単一のアイデンティティをもつ  
近代産業社会＝近代国民国家への帰属  
＝ストック・システム



権力関係を可視化し、社会への参加によって  
多様な利害と権力のダイナミクスの行使をとまなう  
政治主体としての市民



〈わたし〉の生成の「自由」を保障し合う  
相互承認というプロセス  
＝フロー

このプロセスを保障するためのプラットフォーム  
＝〈ことば〉による自己への駆動力の生成

社会はシステム(ストック)からプロセス(フロー)へと展開しているシステムである社会において、「知」の分配がなされ、

個人はシステムとして社会に配置され、システムを構成する個人は社会的存在として自己を形成する

しかし、今や、社会はプロセスへと展開し、

「知」も生成するプロセスへと変容しており、

個人はプロセスである社会にあって、

他者ととともに自らプロセスとして生成することが求められる

↓ position = 多重化するプロセスとしての自己とメタ自己の形成

= 本質としての受動性

このプロセスにおける他者の存在こそが、自己の駆動力となる

脈絡なき個人＝データベースの消費

データベース的な自我の構成と消費

無意識が前景化し、かつ操作の対象となる

自己組織的な社会システムは自己組織的ではなく、  
外部から操作されるものとしてある

外部操作に「否」をいえる〈わたし〉の育成を

他者を抱え込んだ〈わたしたち〉としての〈わたし〉が  
自己への駆動性を高め、外部操作に「否」をいう

個人は、他者性を抱え込んだ受動性として、  
過剰に自己を生成せざるを得ない〈わたし〉となる

〈わたし〉が他者を媒介して〈わたしたち〉となるとき、  
〈わたし〉は〈わたしたち〉として〈わたし〉への  
駆動力を獲得する＝「知」の生成

問われるべきは、この駆動力の方向性と  
この方向性を操作し得る自己と他者との関係性

この関係性を我がものとする、つまり意識化できる力＝〈コトバ〉の力をつけること、これが新しいカリキュラムのイメージとなる